

恋女房染分手綱

道中双六の段

ツナエ 立つ年月も巡り来て、由留木殿のお湯殿子調の姫、早や十二歳に成り給へば、兼々の約束にて東の高家人間殿へ御婚礼極まり、蕾から取る花嫁御、今日旅立ちのお供揃へ、上下さゝめき賑はへり。

刻限は巳の上刻との定めにて、御迎ひの主家老本田弥三左衛門、数献の盃足元はよろくと、狸々緋の道中羽織、白い所は髪ばかり、金柑頭に顔色も、繻珍の立つ付けりしげに、

本田「何とく、お供廻りが揃つたらお先手から乗り出し召され。コレサ文左、源吾左、身は押さへを乗り申す。万事夜前申し渡す通りだ。若党、中間、荒しこ、小者に至るまで、大酒を致さない様に、馬次舟渡し等にて強氣がさつを仕つたらば、曲事でおじやんべ

と言ふところへ、

眉泣きはがし姫君は、

調姫「江戸も東もこちや嫌ぢや。おれは往かぬ」

と泣くく走り出で給へば、

侍衆も

下々も、御門に駆け出で

家老の外、男切れこそなかりけれ。

お乳の人数を変へ、

重の井「コレ申しお姫様、下々の子供さへ、九つ十では物の聞き誤ごります。ア、あれ見さんせ。百里あちらの山川越えて白髪被いた家老殿、皆歴々の侍衆が迎ひませに参つて、江戸へござれば入間殿の惣領嫁御と、傳かれるお身ぢやぞや。お乳の育ての難になれば、女でこそあれこの乳母は、腹を切らねばならぬ。サア、よいお子ぢや、お輿に召せ」

と、威してもそやしても、
調姫「イヤく、皆の騙しぢや。なんの東がよい所、腰元共が歌ふを聞きや。サア皆こゝへ出て、いつも

い。またとき、泊りくの赤前垂れに、ぢやらくら致さない様に。第一、お乗物先で見苦しい。さりながらとき、長の道中下々が退屈致すべし。もし、濡れなどを企つるとも、目立たぬ様に物影へ寄つて、ちよこくく濡れたがよくおんじやる。目出度き折からと申し、ことに女中のお供だ。少々の事は見遁しにして置き召されつちや」

『アツ』と答へて幸領共、

幸領「サア御立ち」

と催すところに

奥より女中声々に、

腰元「ア、待たつしやれく。気の毒やお姫様、『関東へ行く事は嫌ぢやく』とやんちやばかり御意なされ、お袋様も殿様も、たらしつ叱つて遊ばせども、『どうでも嫌ぢや』とおむつかり、お乳の人の重の井殿、色々と申されても、『それ程江戸へ往きたくば、乳母ばかり往きをれ』と、お乳の人の背中をとんくくと打たしやんして、御機嫌が損ねました」

の歌を歌へ、歌へ」

と責め給へば、

お伽小姓の頑是なし、十三なが手を揃へ、

「山も見えざる仮初めに、江戸三界へ往かんして、いつ戻らんす事ぢやゝら、殺して置いて往かんせの、放ちはやらじと、泣きければ

重の井「オ、おきやく。お大名の宮仕へ、琴の組でも歌はいで誰に習ふて派手な歌、姫君などに惜しやんな。必ず置いて貰はう」

と、お乳の人の不機嫌さ、

本田もあまり詮方なく、

本田「申しお姫様、あれは人の口転合。花のお江戸は京勝り、浅草上野の花盛り、また堺町木挽町のでんつくくでこの坊、弁慶や公平がえいやつと、とゝえいなど、切り合ひを見せませう。道中の面白い事、富士の山と申す、天まで届く山をお目に掛けます。先年身共が御結納の御使者に参つた時は、お姫様はまだお二つ。何卒御婚礼のお迎ひに参りたいと申した

が、光陰矢の如しと今年丁度十一年。その様にやんちや仰るまで、長生きを致そうとは存ぜんんだ。サアく、御機嫌直して早うお興に召しませい」

と、力一杯すかしても、

調姫「イヤく江戸へは行きはせぬ。どうでも嫌ぢや」と泣き給へば、

お乳も今は倦み果て、

どうしてよかろう御家老も、呆れてこそはゐられけれ。

お中居の若菜、門外より走り入り、

若菜「ノウお乳の人様、面白い事がござります。十ばかりの剝り下げのちつぽけな馬方が、道中双六とやら、東海道の絵を揚げ、味な事して遊びます。御機嫌直しにお目に掛けなされませ」

重の井「オ、ようぞ氣が付いた。それは聞き及うだ。道中の絵を見せまし、お心も移るため馬子でも子供は大事ない。お赦しぢや、その丁稚に持つて参れと言ふておぢや」

若菜「心得ました」

と呼びければ、

三吉「アイ」

と言ふより慮外をも、返り短き煙管の煙。立ち交じりたる女中の傍、そくはぬ様に見えざるは、さすが童の一徳と、絵を取り出だし双六を、皆打ち交り、遊ばるゝ。

へこれく御覽ぜ打たしやんせ、これこそ五十三次を、ゐながら歩む膝、膝栗毛馬、はいし道中双六。

南無諸仏分身と、書いた六字を六角の、賽は桜木花の都を真中に、思ひくの印を置いて、さらばこちら打出の浜。大津へ三里、こゝで矢橋の舟賃が出舟、召せく旅人の、乗り遅れじと、どき草津。

お姫様よりまづ乳母が餅、一口二口みな口どちやう踊り越え、坂へ越すのも賽次第。賽を振れく、降るや鈴鹿を後に下がれば負けまいと、急に急きより亀山に、煙草火打ちの石薬師。オツと桑名の舟渡し。

所々の名物買ふて、おあしつくづく突く手毬に、ひいふうみいよ、府中江尻にすつとんく、とんと打つたる沖つ波。

と御門に出で、連れ立ち来たる

馬方が、片肌脱いで捌き髪、御前近くも不遠慮に、縁先に揚げ足して。

三吉「ヤレ、ヤレく、有り様達はあたつぽこしゆもない。朋輩共とかけどくに道中双六打つて、沓の銭程してこませうと思ふたに、人呼び廻つてなんでやる。ハレヤレ、ヤレく、きりく乗らつしやれ。馬やろい」

とぞ、つかうどなる。

重の井「てさて利口な野郎ぢやな。船頭、馬方、お乳の人、こちもそちらと同じ事。して年はいくつ、名はなんといふぞ」

三吉「年は今年十一。五つの年から馬追ふて、一代若衆にならずに生へ抜きの念者ぢや。ところで名は自然薯の三吉といひやんす」

重の井「さつてもよい名ぢや。聞けば、道中双六があるげな。腰元衆も打つてみや、姫様も遊ばせ。サア三吉もこゝへ来い。苦しくない」

松原はるゝ膏藥買ふて、月を吸ひ出せ清見寺、由比蒲原や吉原の、花の蒲焼き名物の、鰻の肌、沼津の宿。

三島越ゆれば箱根へ三里、賽目次第に関越ゆる、悪い目打てば手判を取りに、元の京へ立ち帰る。

三吉「合点か」

重の井「オ、飲み込んだ」

小田原外郎大磯平塚藤沢の、障りもなしに双六の、幸先もよし門出よし。

道中早めてとつかはと、急ぐ保土ヶ谷神奈川越え、川崎を越え品川越え、まつ先がけのお姫様、一番勝ちに勝つ色の、花のお江戸に着き給ふ。

皆「一の裏は双六の、幸ひあり悦びあり。慰みありける道中」

と、どつと

重の井子別れの段

（オクリ）興にぞ入り給ふ。

お傍の衆に囃されて、幼な心の姫君、

調姫「かう面白い東とは今までおれは知らなんだ。サアくく往かう早や往かう」

本田「ヤア、ござろうと仰るか。そりや目出度いはく、またもや御意の変らぬ間に、行列揃へ」

と立ち騒ぐ、

お乳の人は勇みをなし、

重の井「そんなら今一度、大殿様お袋様とお盆。これも馬子殿お蔭ぢや、出かいたくそちには礼言ふ褒美やる。そこに待ちや」

と、ざぐめき渡り、奥にお伴し入りにけり。

馬方はついに見ぬ金の間をうそくと、覗き廻れど筵の外、踏みも習はぬ備後表、

三吉「エ、この座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名

ともぎ放せば

むしやぶり付き、

引き退くれば

縫り付き、

三吉「なんの事申しませう。わしが親はお前の昔の連れ合ひ、この御家中にて番頭伊達の与作。その子はわし、こな様の腹から出た与之助はわしぢやはいの。とつさんは殿様のお気に違ふて、国をお出なされたは小さい時で覚えねど、沓掛の乳母が話には、かゝさんも離別とやらで、殿様に御奉公。こなたを乳母が養育し、とつゝあんに逢はせとう思へども、甲斐もない。かゝさんの細工の守り袋を証拠に、由留木殿のお乳の人重の井様と尋ねよと懇ろに教えて、乳母はおれが五つの年、久しう痰を煩ふて、鳥羽の祭の餅が喉に詰まつたやら、つい死んでのけました。乳母が子の一平は、とつゝあんを尋ねに行く。在所の衆が養ふて、漸う馬を追ひ習ひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。コレ、守り袋を見やしやんせ、なんの嘘

の家よりも、こつちの内が結構でござる」

と、独り言してゐたりけり。

お乳の人は大高に、お菓子様々文庫に盛り入れ、

重の井「ドレく三吉、そこにか。マアそちは異な者ぢや。道中双六お目に掛け、それ故に姫君様、お江戸へござろと御意なさるゝ。お上にも御機嫌、これは御前のお菓子、有難う頂きや、お足三筋買ひたい物買や。ことにそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に逢はうと言や。見れば見る程よい子ぢやに、馬方させる親の身は、よくくであらう」

と、いと懇ろの詞の末。

三吉つくづく聞きすまし、

三吉「由留木殿の御内、お乳の人の重の井様とはお前か。そんなりやおれがかゝさん」

と抱き付けば

重の井「ア、こは慮外な。おのれがかゝさんとは、馬方の子は持たぬ」

を申しませう。お前の子に紛れはない。外に望みはなんにもない。とつゝあんを尋ね出し、一日なりとも三人一所にゐて下され。見事沓も打ちます。この草鞋もわしが作つた。昼は馬を追ふて夜は沓打ち草鞋作り、とつゝあんかゝさん養ひませう。とつゝあんと一つにゐて下され、拝みまするかゝ様」

と、取り付き抱き付き泣きゐたり。

お乳は『ハッ』と氣も乱れ、見れば見る程我が子の与之助、守り袋も覚えあり。飛び付いて懷に抱き入れたく氣は急けども、

重の井『ハア、大事の御奉公、養ひ君のお名の傷。偽つて叱らうか、イヤ、可愛げにそうもなるまい。マアちよつと抱きたい、ア、どうせう』

と、百千色の憂き涙、一二の目には保ち兼ね、嘔び沈みてゐたりしが。

重の井『イヤく、我が子ながらも賢しい者、偽つて真とせず、母を心の汚い者と蔑まるゝも情けなし。訳を語つて合点させ、恥しめて帰さんもの』

と、涙拭ふて氣を鎮め、

重の井 「こゝへ来い、与之助」

と引き寄せて、両手を取り、

重の井 「さて、大きくなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしうなせ尋常にも育たぬぞ。顔の道具手足まで、かゝはかうは産み付けぬ。美しい黒髪をこの様に剃り下げて、手足は山のこけ猿ちや。ほんに氏より育ちぞ」

と、またさめざめと泣きけるが。

重の井 「コレ、物をよう合点しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。浅ましう成り下がつたを嫌ふて言ふではさらくない、こゝの訳をよう聞きやゝ。かゝは元御前様の御奉公人、与作殿は奥家老の御子息。互ひに若木の恋風に摺れつ纏れつ、一夜が二夜と度重なり、そなたを懐胎。この事お上へ聞こえては、とゝもかゝも御成敗に会ふ故に、病氣と偽り乳母が所で産み落し、育てゝ貰ふその内に、情けなや八平次といふ者の仕業にてとゝ様は御追放。この

申したは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば、かゝ様にさへ逢ふたらばとつゝあんも出世なさるゝ由。御訴訟なされて下されかし」

と言へば

ちやつと口を押さへ、

重の井 「ア、勿体ない、その乳兄弟は言はぬ事。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のものの。先は他人の世間体。三吉といふ馬追ひが乳兄弟にあるなどゝ、どう妨げになろうやら、蟻の穴から堤も崩るゝ。軽い様でも重い事、ひそく言ふて人も聞く。まづ早う出てくれ」

と泣くく言へば

三吉、

三吉 「かゝさん、あんまり遠慮過ぎました。まづ言ふて見て下され」

重の井 「まだ言ひをるか聞き分けない。夫の事我が子の事母に如才があるものか。合点の悪い、聞き分けない」

かゝが愀氣から不義の事頭はれ、既に御成敗に極まりしを、わしがためにはてゝ様、そなたのためには祖父様の定之進様、勿体ない、わしに代つての御切腹。お姫様の乳離れと言ひ立て、殿様の御慈悲にて姫君様のお乳の人、首尾さへよければそなたも今、奥家老の御子息、二番と下座に下がらぬ人。その時かゝも一所に退けば尤も夫婦の道は立てども、身に余つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん、残つて御恩を報じてくれと、とゝ様の断り故、第一は男のため、夫婦の義理を忠義に代へて、飽かぬ離別をしたはいの。男の子は幼うても、御勘氣の末氣遣ひな、与作が子とばし言やんなや。サ、早う御門へ出や。ア、如何なる因果な生れ性。現在我が子に馬追ひさせ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人とお局よと、玉の輿に乗つたとて、これが何になる事」

と、声を忍びに泣くばかり。

子は生れ付き賢くて、聞き分けある程猶泣き入り、

三吉 「悲しい話を聞きました。さりながら、常に乳母が

と制する内に

奥よりも、『お乳の人はどこにぞ。御前から召します』と呼ばゝれば、

重の井 「アレ聞きや、人が来る。出たも」

と手を取つて引き出だす、

不憫や三吉しくく涙、頬冠りして目を隠し、沓見まつて腰に付け、見すばらしげな後ろ影、

重の井 「こりや、今一度、今一度こちら向きや。山川で怪我しやんな、雨風雪降り夜道には、腹が痛いと作病起し、二日も三日も休んで煩はぬ様にしても。毒な物喰はずに腹や麻疹の用心しや。可愛の形や痛々しや。千三百石の世取りが、なんの罰ぞ咎めぞ」と、式台の段箱に、身を投げ伏して嘆きしが、

懷中の有り合ふ一分十三袷紗に包み、

重の井 「これ嗜みに持つてあや」

と涙ながらに渡さるゝ

三吉見返り、恨めしげに、

三吉 「母でも子でもないならば、病まうと死なうと要ら

ぬお構ひ。その一分も要らぬ。馬方こそすれ伊達の与作が惣領ぢや。かゝさんでもない他人に金貰ふ筈がない。エ、胴慾なかゝさん覚えてゐさつしやれ」

と、『ワツ』と泣き出すその有様

母は魂消え入つて、

重の井 「養ひ君お家の御恩思はずば、さて一人子を手放してなんの遣らうぞ。奉公の身の浅ましや」

と、悶え焦れて嘆きける。

時に奥口ざぐめいて、『早や御立ち』と姫君の、御輿昇き上げ行列立て、お乳の人の乗物を、平付けにこそ昇き寄せけれ。

お乳はさあらぬ顔付きして、

重の井 「姫君のお伽に、最前の馬方をこの乗物に引き付け、お慰みに歌はしや」

幸領 「畏つた」

と幸領共、

幸領 「こりや、そこな自然薯め。歌ひをらう」
とぎこつなく、

幸領 「ヤア、こいつは吠えをるか」

幸領 「なんぢやこりや、忌々しい」

と、握り拳を二つ三つ

戴きながら泣き声に、

三舌 「ハア、

へ坂は照るく鈴鹿は曇る、土山間の間の土山、
ハア、雨が降る」

降る雨よりも親子の涙、

中に時雨るゝ、雨宿り

(2025.9.7)